

**第 1 回新生公立鳥取環境大学運営協議会
及び第 1 回公立大学法人鳥取環境大学評価委員会 議事概要**

日 時 平成 23 年 12 月 27 日（火） 16：15～17：25
場 所 鳥取県庁本庁舎 3 階 第 4 応接室
出席者 《新生公立鳥取環境大学運営協議会関係者》
○鳥取県：平井知事、高橋企画部長
○鳥取市：竹内市長、松下企画推進部長
《公立大学法人鳥取環境大学評価委員会委員》
○寺垣琢生（弁護士）
○中永廣樹（前鳥取県教育長）
○福嶋登美子（株式会社ブリリアントアソシエーツ代表取締役）
○福宮賢一（明治大学副学長）
《学校法人鳥取環境大学》
○古澤学長、谷口常務理事

【新生公立鳥取環境大学運営協議会】

○平井知事あいさつ

- ・これから評価委員会の話があるかと思うが、寺垣様、福嶋様、中永様、福宮様には大変お忙しいところ御足労いただき感謝申し上げます。
- ・いよいよ大きな議論を経て、新年 4 月から鳥取環境大学が公立の大学として再スタートを切ることになった。
- ・経営学部を新設し、山陰地方初の機能を果たすことになる。また、福島原発や東日本大震災など様々な局面で環境というものがクローズアップされて、学生達や社会全体の関心を引きつけるようになってきた。
- ・環境という言葉に冠した鳥取環境大学の発展が期待される世の中によろしくなってきたと思う。
- ・設立に当たり、竹内市長と様々な協議をして、大学のスキームづくりを古澤学長を始め大学当局と進めてきた。
- ・正直いろいろな議論があったが、この年末までの入試の状況は 5 倍の競争率となっており、その意味で、これまでとは打って変わった大学がようやく見え始めたという感じがする。
- ・その大学運営を円滑に進めるために、我々としてはその土台を作る必要がある。
- ・ここに法定協議会を立ち上げ、公立大学の土台をしっかりと築きあげていきたい。
- ・評価についても向こう 6 年間の大学のあるべき姿を刷新していただきたいと思います。
- ・大学の評価については、より具体的で、県民の皆様、或いは県民代表である予算を最終的に決める議会の皆様にもお諮りいただけるような内容がふさわしいと思う。
- ・役所が作ると努力目標ばかりになってしまい、目標がぼやけてしまう。そのようなこ

とではなくて、むしろ、これは絶対にクリアするのだというものを作る。

- ・特に、経営の辺りはしっかりとしたものがないと、今までの大学経営の繰り返しではないかという議論もあるので、厳しい目で見ていただきたい。
- ・向こう6年間の目標であるが、経過期間を区切りながら経営目標を立てることも可能かもしれない。
- ・学生の募集に関する目標などもあってもいいのかもしれない。研究の成果、地域貢献の新しい分野の目標も、トルクとの関係で必要になろうかと思う。
- ・是非皆様の御識見を反映させていただき、大学、鳥取県、日本、世界にとってなくてはならないものとなるように、しっかりとした種を蒔いていただければありがたい。
- ・皆様の格別の御協力と御高配を賜うよう切にお願いし、良き年が皆様にやってくるようお祈り申し上げ、冒頭のあいさつに代えさせていただく。

○竹内市長あいさつ

- ・平井知事からお話があったように、来春4月の公立大学としての鳥取環境大学のスタートに向けて、準備を進めているところである。
- ・今日御議論いただく中期目標の存在は、非常に大きいものだと考えている。
- ・新しくスタートを切る鳥取環境大学が、どのようなものを目指して、どのような努力をするのか。そうしたことが明らかとなり、県民、市民に十分に説明責任が果たせるようになると思う。
- ・それは同時に、大学に課せられた責任、県、市に課せられた大きな責任ということにも繋がると思う。
- ・中期目標は、大学を理解いただき、大学に対して県、市が努力を続けることも目標とし、高く掲げるべきものと考えているので、特に評価委員の皆様には、この内容に関して十分な御検討をいただきたい。
- ・私は、これまで平成13年度からの鳥取環境大学の11年の歩みを見てきたので、来春新しくスタートする大学が3年目以降も持続的に発展することが必要だと思っている。大学のスタート後、3年目くらいから力が抜けてくるような事が仮にあれば、この先深刻な問題を生じかねない。
- ・そういったことに関しても中期目標の持つ意味は非常に重いと思うので、必要に応じて見直す時期があってもいいと思うが、まずは当面6年間の目標として定め、皆の心を一つにして一丸となって、その実現を図ることができたらと念願している。
- ・各委員の皆様方には、是非とも高い御見識と地域に対する理解、愛情を環境大学にも注いでいただくようよろしくお願いいたします。

●事務局

- ・それでは運営協議会の設立について議事に入っていきたいが、議事に先立ち一つ報告させていただく。
- ・諸条件が整い、12月20日に文部科学省と総務省に公立大学法人の設立の認可申請を行った。この公立大学法人の設立を前提として、この度運営協議会を立ち上げよう

というものである。

- ・詳細について中山事務局長から御説明する。

●中山事務局長

資料1から3まで説明（略）

●中山事務局長

- ・御異存なければ、本日をもって、このような形で運営協議会を設立したい。

《異議なく承認》

●中山事務局長

- ・それでは、本日をもって運営協議会を設立し、2月議会にも設置の報告をさせていただく。

●事務局

- ・それでは、ここで評価委員会の委員の紹介をさせていただく。（略）
- ・以上をもって運営協議会を終了させていただく。
- ・評価委員会の委員様には引き続き中期目標等の審議をしていただきたい。

【公立大学法人鳥取環境大学評価委員会】

●事務局

- ・ただ今から評価委員会を始めさせていただく。
- ・本日は初顔合わせであるので、事務局で検討していることを一通り説明させていただき、忌憚のない御意見をいただければと思う。
- ・最終的には、2月議会に向って中期目標の案を練り上げていくことになるが、まずは御意見をいただきたいということである。
- ・その前に、規約では、この会に委員長と副委員長を置くということになっている。
- ・この評価委員会は、特段何かを決める委員会ではないので、意見の取りまとめをしていただくことがその主たる用務になろうかと思う。
- ・規約では互選でいうことになっているが、皆様の方で何かお考えがあれば伺いたい。

《特に意見なし》

- ・本日は委員会自体の立ち上げが主であり、また、初めて顔を合わせたところで、柳谷委員も御欠席であるので、次の機会の皆様が揃ってから決めていただければと思う。
- ・それでは、事務局の方から中期目標について説明をさせていただく。

●中山事務局長

資料 4 説明（略）

○寺垣委員

- ・公立化前の数値がたくさん出てくる。直近の数値はなかなか難しいと思うが、平成 22 年度までの数値は出ているのか。

●中山事務局長

- ・その辺の数値は今精査をしている。今後目標を掲げる時には、数値を掲げ、それ以上のものになりたいと思っている。
- ・参考数値に若干書いているが、数値の精査等が済んでいないので空欄のままとなっている。

●事務局

- ・現在の大学の回数、人数などが入ってくるという形でイメージを作っている。

○福宮委員

- ・昨年の評価検討委員会の後のことが分からないので教えていただきたいが、環境学部と経営学部が新設され、旧来の環境情報学部は学生がいるのでその学生が卒業するまでは環境情報学部は残る。卒業してしまうと、再入学などがあるのでそれに対応するだけはやって、後は学部を無くしていく。
- ・平成 27 年度が完成年度なので、すぐというのは厳しいかもしれないが、第三者評価をどこかで受けることを予定しておいた方がいいのではないかなと思う。
- ・第三者評価は、細かいことがいろいろあるが、準備をされ、完成年度を迎えて何年後かに評価を受けるのがいいのかなと思う。

●谷口常務理事

- ・大学は、7 年に 1 回第三者評価を受けないといけない。学校法人としては、平成 19 年に 1 回受けた。

●中山事務局長

- ・この順番でいくと平成 26 年の学部完成前に評価を受けることになる。どこで受けるのかがいいのか再検討がいると思う。

○福宮委員

- ・大学が完成年度を迎えて安定してからでいいと思う。

○福嶋委員

- ・寺垣委員と重複する部分があるかもしれないが、事前に送ってもらった資料の中に収入と支出というところがあり、収入のところに競争的外部資金がある。今の状況が分

かれば教えていただきたい。

- ・後、西部のサテライトキャンパスはどの辺をイメージしているのか、また、平成24年度入試で推薦2期の合格者の状況などが分かれば教えていただきたい。

●谷口常務理事

- ・今現在の外部資金で大きなものとしては、環境省から資金を受けているもので、一つは日本海の高み問題。もう一つは新しいエネルギーのバイオを使ったもので、2件採択がある。これらは2年間、3年間と継続して受けている。
- ・これらは、サステナビリティ研究所での大きな研究の課題となっているものである。
- ・この他、個々の教員が主体であるが、外部資金の中で文部科学省から科研費を受託して研究費に当てているものがある。

●中山事務局長

- ・先だって県議会でも質問があり、環境大学の外部研究費は、他の大学と比較して、採択率は悪くはないが、額や申請数がかなり少ないのが現状である。
- ・文科系と理科系の大学であり、工学系がないので額は別として、申請の数であるとか教員がどれだけかわれるのかなどは、これからの中期目標の中で目標値、到達目標などを掲げる必要があると思う。
- ・西部サテライトであるが、米子の高島屋の近くに元NHKの庁舎があるが、その2階に場所を借りるようにしている。
- ・機能としては、就職関係の相談を受ける人間、学生確保をする人間、それにトルクの研究員が、毎日の駐在はできないが、例えば2日に1回、3日に1回出かけていき地域振興にかかわる窓口とするなど、米子での拠点としたいと考えている。
- ・米子の経済界からは、東部にある大学ということで非常に遠いと聞いているので、一つの拠点となればと思っている。
- ・入試の状況であるが、一般公募2期まで終わっていて、志願者は532名となっている。
- ・昨年の平成23年度入試では志願者460名であり、ずっと受験者数が下がっていた部分が、徐々に回復基調に乗っており、現時点で昨年のトータルの数字を超えている。今後一般入試等があるので、これ以上に受験者数が期待できている。
- ・ただ、中期目標を考えていただく上で留意いただくのは、来年からは公立大学になるが、今回は私大型の入試をやっているので、他の国公立大学との併願が可能である。
- ・環境大学の受験者は、国公立にも出願できるし、有名私大への出願もできるなど出願しやすい状況になっている。
- ・今まで以上に受験者の数は増えると思うが、安心しないで、安定的に志願者をどう確保するのか、これから環境大学に検討願いたいところである。

○福宮委員

- ・競争的資金について、中期目標でどれだけ獲るのかということであるが、これは教員

に非常に負担になりやすいことである。

- ・自分では一生懸命やろうと思っても事務的なサポートがないとなかなか大変である。
- ・苦勞して獲っても授業負担は減らないとなると、だんだんやる気がなくなってくる。
- ・一生懸命やって苦勞して自分だけ損をすることになるので、事務的なサポートをお願いしていかないと目標達成は難しいと思う。
- ・事務的なサポートを手厚くして競争的資金を獲得するということはあると思うので、どこかに書いてもいいのではないか。
- ・中期目標では言わない方がいいのかもしれないが、新学部ができてステューデントレシオが低い、教員一人当たりの学生数が少ないのではないかと思う。
- ・恵まれていると言えるが、コストの面で言うと費用がかかる訳である。
- ・他の公立大学と比べてどうなのか、それを改善するのかしないのか。充実した教育をするのだ、だからコストがかかってもいいのだとするのか。
- ・人事が絡み、なかなか微妙なところなので書かなくてもいいが、念頭においた方がいいと思う。

○中永委員

- ・この委員会の機能がよく分かっていないが、今日のテーマは中期目標についてであり、運営の計画、6年間の中期目標がいいか悪いかを評価するということではどうか。
- ・もう一つは、年次的に進みながら、経営がどうなっているのかという結果の評価を、年次ごとに行っていくことが我々の大きな役割と考えてよいのか。
- ・目標を今回考えるとしても、年次ごとに評価を立てて、その評価に基づいて目標を定めていくということが連動して起こる。
- ・第三者の長いスパンでの評価もされると思うが、中期目標を立てるための基本的な評価の項目、基準をどのように見て行ったらいいのかと思う。
- ・今日は中期目標がテーマになっているが、次回、持って帰って意見、質問を出していいのか。今日決まってしまうのか。
- ・資料4のIV番目に業務運営と改善及び効率化に関する目標というのがあるが、達成すべき目標はないと。これはV番目の財務内容の改善に関する目標の中で合わせて後で述べてあるということだったが、経営体制に関する目標はどのような達成すべき目標として書き込まれるのか。これは大きな問題で、分かりにくい、見えにくい問題なので非常に大変だろうなと思うが。
- ・昨年の評価検討委員会からいろいろと申し上げてきたが、一つは学校を魅力ある内容を持ったものにすると。教育課程をしっかりとされて、教育指導をしっかりとされて、先生方の研究も十分にされて、魅力ある学校を作っていくわけである。
- ・もう一つは、学校の教職員が一丸となって、公立化で安心するのではなくて、危機感を持ちながら、力を合わせて一丸となっていく体制が非常に大事だと思う。
- ・学長理事長が一人になり、強力なリーダーシップを発揮されることはいいと思うが、それに教職員が一丸となってきちとした体制で教育、研究をやっていくことは非常に重要だと思う。

- ・数値目標としてはなかなか難しいが、何か目標が担保されないといけないと思う。

●中山事務局長

- ・こういった評価をしていただくかというのは、今回、これからの中期目標の評価という視点で書き加えさせていただく。
- ・年度ごとに評価委員の皆様には評価していただかないといけないことも出てくると思う。
- ・大学で、余剰金が出て仮に黒字になった場合は、設置者側に戻すのか、大学が使っていいのか判定をお願いしたいとか、決算をしたらその中を見ていただくということなど、その都度決めていただくこともある。全部は書ききれないが、評価をこういった視点で行うのか。中間評価なり評価項目などもあるので、そちらで挙げさせていただく。
- ・これからのことであるが、この中期目標は今日で決めるつもりはない。2月議会の案件なので、2月の始めごろには成案にする必要があるが、1月に評価委員会を開いていただき議論していただく部分に加えて、後は郵便、メールでのやりとりなどで、中身を変えていただきたいと思う。
- ・併せて中期目標については、評価委員会の委員の御意見を聞くというほか、大学の意見も聞くことになっている。
- ・外部委員も含めた準備会を設けているので、そこでも意見を聞きながら、第三者の目がよりよく入るような計画になるように、1か月ほどの時間しかないが精力的に作業させていただき、中身を入れさせていただきたいと思う。
- ・経営体制の目標であるが、御指摘のようにうまい数値目標がない。正直、数値目標としては表し切れていない。
- ・中永委員が言われたが、経営体制の数値目標がなかなか思いつかなくて、この辺りについては御指摘を受け、少し考えさせていただきたい。

○福宮委員

- ・中期目標ではないと思うが、教育情報の公開ということが義務化されている。出しにくいところもあると思うが、法律であるので、どこかの時点で公開しなくてはならないと思う。
- ・ホームページを拝見してもほとんどそういうものが出てない。
- ・なかなか難しいところがあるとは思いますが、他の大学に比べて出てないと何か隠したいのかなという判断を受験生がしてしまうかもしれない。

●中山事務局長

- ・数値化もいいかもしれないが、情報公開については目標的な項目も起こしているので、先生が言われたようにその辺りは、少なくとも文言でも加えたい。

○福嶋委員

- ・募集定員の各学部138人と138人という数は、理想的な数なのか。

●中山事務局長

- ・この辺りは大学に答えてもらった方がいいかもしれないが、当座は、半々で学部申請をされている。
- ・申請である程度は決めないといけなかったので、276人の定員の中の半分半分という格好の文系、理系で分けている。
- ・将来的に希望者がどう推移するかということを見ながら考えて行く問題だと思う。
- ・当然我々としても、この学部が未来永劫このままかということにはならないと思うので、どこかで定期的に、或いはどこかの時点で大学側に、本当にこの定員でいいのかということの点検はお願いしないといけないと思っている。
- ・ひとまず仮に半分半分という形で大学の方での設計かと思っている。

○福島委員

- ・この276人という定員は理想的な定員なのかということも併せて知りたい。

●高橋鳥取県企画部長

- ・平成20年までは324人という定員だった。
- ・それで、定員がなかなか充足しないという流れがあって、学校法人が文部科学省とのやり取りの中で、少しスリム化した定員を一度設定しているということがある。
- ・我々としては、もう少し志願者が増えて学生がここで学びたいというような流れができてくれば、この定員についても少し変更する部分かなとは思っている。
- ・当然、定員割れを起こしているという状況の中で定員枠を拡大するというのは、文部科学省との手続上難しいということがあったので、現行の定員枠を一杯に使った形の中で、2つの学部定員を割り振りしたというのが正直なところである。

●中山事務局長

- ・施設としては、320人程度まで入る。施設の理想的には、そこまでは十分キャパシティがある。

○福島委員

- ・商売柄収入と支出を考えるもので。
- ・志願者は増えてはいるが、23年度の実際を見ると、入学者は223人ということなので、実際に志願者の半分ということである。
- ・合格者よりも150名ぐらい減るということである。
- ・それを思うと本当に24年度は大丈夫なのかなと感じる。
- ・結局入学されていくらという所もあるかと思ったので、少しそれが気になっていた点である。
- ・多くの公募のタイミングがあるが、一般公募第1期の11月18日の発表の時点での90名の募集というのが、現在の時点か。これは121名採ったということか。

●中山事務局長

- ・121名が入学金を納めているという状況である。

○福島委員

- ・そうすると指定校と併せて151名か。
- ・一般公募第1期の定員の90人に対しては、多めに採っているという形か。

●中山事務局長

- ・そのような形になる。
- ・大学に聞くと、併願ができるので。
- ・例えば、ここで指定校、推薦をとっていただき、有名私立に合格されるとか、或いは国公立に合格されたら、そちらに行くという可能性も無きにしも非ずであるので、若干そこは多めに採っておられると聞いている。

○福島委員

- ・大変素人のようなことを伺うが、第2期（A方式）の2月のときに94名の募集になっている。
- ・これは、276名を募集されるに当たって、1期と2期でこのような割り振りにするということが当然だということかもしれないが、私はその辺が少し良く分からない。
- ・第1期の方でたくさん募集するというのは難しい話であるということか。第1期は推薦か。

●中山事務局長

- ・そうである。

○福島委員

- ・推薦をあまり多くするのは学校のためによくないと。それでこういうことになっていると。

●中山事務局長

- ・今は半分半分ぐらいで設定されている。

○福島委員

- ・志願者が圧倒的に多い338人というのが第1期に出てくるわけであるので、ここはかなりふるいに落としているということから考えたときに、どうなのかということを感じる。
- ・もし自分が経営するのであれば、前半にもっと募集を広くして、しっかりハードルを低くして、第2期に臨む方が、メリットが高いような気がする。

- ・定員割れしたということで、こういったことも柔軟にできるのであれば、考え方の 1 つではないのかなと。

○中永委員

- ・少し現場の観点から。
- ・なるべく定員を充足できるような学生を確保するというのは、おっしゃるとおり大事なことである。
- ・これは、私の経験から言うと、早く推薦で決めたいという子達は、最後まで勉強も頑張って頑張ろうという子達と、少し違う気質を持っているので、あまり早い段階で推薦でたくさん学生を採ると少し心配である。
- ・ある程度の所で押さえておいて、一般入試で競争しながら入って来る、最後まで頑張って来るというような、そういうようなことで、しっかりした学生を採っていくというようなことが、私は大事なことかなと思うので、そこにあまりこだわらない方がいいような気がする。

○福嶋委員

- ・それは今日考えながらずっと思っていたが、現実問題は置いておいて、そうは言ってもということもあったので。
- ・であるので、この 276 人が理想かと申し上げたのは、もっと広げられるのであれば、まだ考える余地があるのではないかなと思っての話である。

○寺垣委員

- ・定員が適正かどうかを考えた時には、施設としては 300 と何人か入ると。ただ、教員 1 人当たりの学生数としては少ないということは、多分人数によっては広げるべきなのであろうという感じでいいということか。

●中山事務局長

- ・合格者自体は確か文部科学省基準でも、定員の 1 コンマ数倍とか、そのような形までの許容範囲はあるように聞いているので、その辺りは福宮先生が言われたように教員と学生数とのあんばいなどの具合を見ながら大学側で御判断をいただく所が出てくるのかなと思う。

●高橋鳥取県企画部長

- ・先ほど事務局から御説明したように、今年の場合は、少し特殊な入試で、公立になる前に私学のスケジュールで入試ができる。
- ・であるので、今までの所、相当関心も高く、反響もいいということもあり、それに加えて、併願ができるということで、おそらく冬の入試は相当な倍率になると思う。
- ・それは、今まで公立化した大学の先例などを見てもそうである。おそらくその辺も鑑みて秋の推薦の入試と、冬の入試の定員を割り振ったのだと思う。

- ・あと問題なのは、おそらく相当な倍率になるが、当然併願をしてくる学生がかなり多くなるので、その歩留まり率を大学のノウハウの中で、きっちりやっていただき、定員を一定程度確保できるような合格者数を出していただく必要があるということが、今年について言えば一番課題かなと思っている。

●古澤学長

- ・その部分について、具体的に話をさせていただきたい。
- ・A O入試、それから推薦、指定校推薦とあり、それぞれ学生が確定している部分に加えて、推薦などで既に入学金を払ってくれている学生が100%入学すると、最終的にこれから実施する入学試験の定員通り入学したとして341名になってしまう。
- ・それで、この辺りは、少し多めにとっている。
- ・毎年では、この辺の歩留まりは70%になっている。
- ・それで計算すると、およそ300名が確保できる状況まで、少なくとも今の入学試験では採っている。
- ・この後、一般入試のA方式、それからセンター利用入試があるので、その辺りで調整しながら、300名前後に抑えて行くというのが、今我々の考えているところである。

○福島委員

- ・実は自分の会社でこの冬から環境大をやめた生徒を預かっている。
- ・入学したからと言って最後までいると限らない部分もある。それだけに魅力ある運営が必要だと思う。
- ・新しい学部ができるので、再入学を是非勧めたいと思うが。

●高橋鳥取県企画部長

- ・我々もそこを一番心配している。
- ・あまり合格者を出しすぎても、大学の質というか、そこも確保したい。バランスが必要である。

○福宮委員

- ・指定校やA Oで先取りするというのは、一般入試の枠を少し狭めて、そこで競争率を上げて偏差値を高めるという戦略もある。
- ・であるのでそこを細くしてしまうと偏差値の方が落ちてしまっていて、また悪循環になるということもある。
- ・半々だと言われたので、入試によらない入学は半分までということであり、制限いっぱいである。戦略としては、そのことをやっていると思う。
- ・あと、推薦が決まってから勉強をしなくなるということであるが、それはどこでも同じようなことがあって、私どもの所では、課題図書か何かを何冊か与えて、定期的に報告しなさいというようなことをやっている。
- ・それでいやになってしまったらしょうがないが、フォローが必要である。

●古澤学長

- ・我々も厳しくいろんな宿題を出している。
- ・もう既に9月ぐらいから決まっている子もいるので、そこには毎回宿題を出して勉強させている。なかなか手がかかるが。

○中永委員

- ・この中期目標であるが、いろんなことを本当によく網羅してあるとは思いますが、例えば高知工科大学のように、公立化して、既に成功して、学生もたくさん得て、かなり成果も上がりつつある所。このような所からも、もちろんある程度この参考になるようなデータはもらわれて、この中に盛り込んであると考えてよろしいか。
- ・この環境大の独自性もあるので、あまり気にしすぎてもいけないのであろうが、非常にうまくいっている所とか、課題になるような所というのは、この中に盛り込んでおかないといけないかもしれない。

●中山事務局長

- ・数値目標の部分は、高知工科大学であるとか、秋田の国際教養大学であるとか、いくつかの例を見させていただいた。
- ・やはり経営がうまくいっている所ほど、経営目標や数値は、書かれていないものであり、大学側には失礼かもしれないが、設置者側としてできるだけ到達目標、或いは目的の数値等は書ききりたいと思っている。
- ・他の県立大或いは公設民営から公立大になられた所よりも数値目標は多めになっていると思うが、これで足りているかどうかということは私も不安であり、もう少し足してもいい部分はあるのではないかとと思っている。
- ・またこの辺り、ここもチェックしなければいけないということでお教えいただければ、その部分の盛り込みは必要かと思う。

○中永委員

- ・あまり縛りすぎてしまっても、意欲的なものも必要である。
- ・その辺の所を柔軟に組み入れながらやるということが大事だと思う。

●高橋鳥取県企画部長

- ・参考資料2で、各大学の中期目標を1つの様式に落とし込んだものがあり、一番左が高知工科大学である。
- ・先ほどの6ページの財務の目標の中で、人件費の割合などを置いてみたのも高知工科大学でそのような指標を置いておられたものを参考にした。
- ・この辺りの所も、我々はいろいろと目標を作りたいし、大学側の思いもあるだろうが、もう少しいい指標があれば他のものを入れるということもあるのかと思う。

●中山事務局長

- ・中永先生が言われたように兼ね合いが必要である。
- ・地方独立行政法人法上の大学の自主独立という部分を犯すわけにもいかないし、設置者としてはいい経営をしていただきたいと思うので、その微妙なバランスを引き続き模索したいと思っている。

○福宮委員

- ・環境学部と経営学部と新設の学部の目的、理念は書いてあるが、環境大学が持続可能であるためには、この特徴付けというものがものすごく大事だと思う。
- ・中期目標に書けるかというのは別であるが、我々はこのような経営学部を目指すのだと。他の大学に無い経営学部を目指すのだと。他の大学に無い環境学部を目指すのだという所を何か書きこんだ方がいいような気がする。
- ・実現できるかということはまた別のことであって、目標は、このような高い目標を掲げているのだということがあると、すごく魅力的に見えるのではないかなと思う。

●中山事務局長

- ・ここは大学側とよく相談する。

●古澤学長

- ・もちろん新参の大学であるので、改めて経営学をやっていく我々としては、よその大学と違う魅力ある部分は当然考えており、この中に書くとなれば、書いてもいいと思う。
- ・先ほど中永委員の方から御質問があったように、これは目標となって、この目標に沿って、我々はこの目標を達成するための計画を毎年立てて行って、最終的な6年間の計画を立てることとなる。
- ・このような計画に沿って、多分これからいろんな評価をいただくということになると思っている。

●事務局

- ・盛りだくさんの内容であるので、なかなか全て今言い尽くせないというところはあるかと思う。
- ・やり取りの中でもあったが、お気付きの点は事務局の方に言っていただいても結構であるし、また、検討するにも今の状況が分からないというような話があれば、その辺りきちんと情報を揃え、委員の皆様提供させていただきたいと思う。

●中山事務局長

- ・参考数値など、このようなものしか今日まだお示しできていないので、できたものからまた別途送付するなり、御連絡させていただいて、それを踏まえてまた会議の無いところでも揉んでいただけたらと思う。

●事務局

- ・そのようなことを通じて、この中期目標の素案をまとめて行きたいと思う。また、今後のスケジュールということになるが、また日程調整をさせていただき、1月の半ばから、半ば過ぎぐらいにもう一度、こういうような会合形式のものも持ちたいと考えている。
- ・そのような中で、随時、御意見をいただけたらと思っている。
- ・以上をもって本日の評価委員会を終了したい。

以 上